



## 九州支部・市民フォーラム開催とその参加記

九州支部では、毎年九州・沖縄各県の回り持ちで市民フォーラムと支部大会を開催しています。今年度は、支部の活動上初めて国外で開催しました。以前から中国・四川省の四川大学と熱心に交流されておられた熊本大学名誉教授木田先生は四川大学-熊本大学共同ラボを立ち上げられ、ご退職後、四川大学にて生物化学工学の研究と教育を展開されておられます。ご存じのように、現在中国ではさまざまな環境汚染が問題になっていますが、九州の地で育まれた持続型の環境処理を中国の産官学関係者、および一般市民に紹介するのが今回の目的です。

- ◆四川省農村環境保護と汚染抑制 (四川大学教授) 湯 岳琴
- ◆廃棄物系バイオマスのメタン発酵によるおおき循環センターくるるん (四川大学教授・熊本大学名誉教授) 木田 建次 (佐賀大学准教授) 田中 宗浩
- ◆メタン発酵消化液の肥料利用技術
- ◆山鹿バイオマスセンターにおける家畜糞尿の堆肥化とエネルギー化 (九州沖縄農業研究センター 畜産草地研究領域 上席研究員) 田中 章浩
- ◆産業廃棄物の総合利活用システムにより構築した生命(バイオ)の森 (九州産廃株式会社 取締役統括本部長) 持永 義孝 (亜連科技公司会長) 鐘 亜鈴 (JNC(株)研究開発本部長) 岡山千加志
- ◆都市生ごみのエタノール・メタン発酵二段発酵によるエタノール生産
- ◆竹からの濃硫酸糖化法による輸送燃料用エタノール製造試験

市民フォーラムは11月2日、雨の中、四川大学望江キャンパスで開催されました。日本からの参加者18名を含めて、120名ほどの聴衆が集まりました。中国四川大学建築と環境学院書記・陳勇氏と日本側の園元生物工学会会長の挨拶の後、上記のタイトルの講演がありました。最初に四川大学湯教授が四川省農村部の環境問題の現状を報告し、次に木田、田中(宗)、田中(章)、持永氏らが、九州の地で取り組んでこられた資源循環型の街づくりについて産・官・学の三分野からの異なる視点での取組みと成果を述べました。また、四川の会社からは大学食堂の残飯を利用したエタノール生産の試み、日本からは九州で大きな問題となりつつある竹からのエタノール生産の発表がありました。

このような海外での講演会、フォーラムなどにおける最大の問題点は通訳がいかにかスムーズに行われるかにあります。今回のフォーラムでは通訳とスライドの作成に大きな工夫がありました。まず、通訳には、通訳を専門に行っている方ではなく、実際にこれらの分野で研究し、かつ日本留学の経験があり日本語に堪能な方が選ばれていました。このため、質疑応答においての専門的な用語もきわめてスムーズに通訳され、ディスカッションがずいぶん深まったと思われます。発表用のスライドは、写真2に示すように同じ内容のものをあらかじめ日本語と中国語で作成され、これが同時に映写されます。このスライドと逐次訳される言葉により、講演内容がよく理解されました。日本の演者への発表に、中国の各地からの公務員、会社関係者、および学生から活発に質問がなされていたことから、この通訳・スライドの表示法が適切であり、彼の地の方々に九州の先進的な取組みに対して大きな興味を引き出したものと思われました。これらの準備に係る労力は大変なものと思われませんが、このような取組みこそが日中の、学問の、そして人々の相互理解に必要と痛感しました。

翌日は、エクサカーションで成都市の中を案内いただきましたが、特に印象深かったのは、白酒製造所の遺跡見学でした。白酒は中国古来の、穀物の固体発酵による蒸留酒ですが、成都市にある水井坊は、元の時代から白酒を製造していた最古の製造場所の一つです。遺跡といっても現在でもその一角で製造が行われており、我々が見学を訪れた時はとてもタイミングが良かったようで、実際に行われる作業を目の前で見ることができました。

成都市は、現在旧市街の周辺部を猛烈な勢いで開発を進めているとのことで、巨大な空港の新ターミナルビル、大会議場、建設中の大型ショッピングモールなど、毎日毎日その姿を変えつつあるようです。その新しく開発されつつある地区の四川大学の新キャンパスも見学しました。木田教授の研究室もこの新キャンパスにあり、中はいかにも大学の研究室でしたが、別棟の実証設備はまるで工場そのものでした。そこにテストプラントが据え付けられているようで、四川大学が環境保全のための教育と研究に力を入れていることが実感できました。



写真1. 中国語によるプログラム



写真2. 四川大学湯教授講演の様子



写真3. 佐賀大学田中准教授の講演